

作業を基盤としたソーシャル・インクルージョンの視点 地域や社会における集合体としての作業

サラ・カンターズィス

クイーン・マーガレット大学

廣島 玲子（関西福祉科学大学）・吉川ひろみ（県立広島大学）訳

要旨

歴史的、社会的、文化的、経済的状态を含めた我々の社会的世界の構築は、一部の人々を不公正な立場に、つまり家族や地域社会で営まれる日常生活に対して完全な参加から排除する立場に置いてきた。「ソーシャル・インクルージョン（訳注:社会的包含, 社会的包摂と訳されることがある）」という用語は、社会を変革し、「すべての人のための社会」を再構築するために実践するプロセスを意味する。しかし、これは複雑で多層的なプロセスであり、すべての人による変化を必要とする。この中では政策と経済の変化が不可欠ではあるが、地元の社会世界、近隣とコミュニティの公共の世界における変化が重要であることもわかっている。私は本日の講演で、集合体としての作業と私たちが行ってきた集合体としての作業に関する研究と実践がこれらプロセスの重要な部分であることを提案したい。

まずソーシャル・インクルージョンの概説、次に集合体としての作業の概念、そしてインクルージョンと排除両方の状況を含む地域社会の構築と維持に対する集合体としての作業の貢献について述べる。その後、日本とヨーロッパの例を含めて、ソーシャル・インクルージョンを支える集合体としての作業がどのように発展するかを議論することを目指す。この発展に関して不可欠な部分は、公共世界的重要性についての理解、認識、参加市民権の概念の理解である。我々の地元地域やコミュニティにおいて集合体としての作業を通してすべてのソーシャル・インクルージョンが可能となれば、今日の社会において多くの人々が直面する生活上の不公正な状態に対処するために必要な社会変革の一助となるだろう。

作業科学研究, 12, 14-37, 2018.

キーワード：集合体としての作業、参加市民権、公共の世界

はじめに

第 21 回作業科学セミナーにご招待いただき、非常に光栄に感じています。私が日本に来るのはこれが 2 回目、1 回目は 2014 年 WFOT の時で日本は素晴らしい国だと思いました。今日この場で我々社会が抱える問題における作業の重要性を皆様と共有できればと思っています。

ソーシャル・インクルージョンは複雑で、異なり、相反する表現をしています。私達がどのように一緒に生きていくか、そのためにどのように社会を変えていくかについてお話していきます。この社会変化とは、社会が作っている現実を理解することから始まります。それは文化や経済を含む、歴史や社会の状態からつくられた現実で、そこで

は一部の人々を不公正な立場に追いやっています。この不公正な状態は、他の人が社会やコミュニティでついている作業にその人達がつける可能性を制限し、健康で活躍できる可能性を制限しています。

もし、私達の仕事を研究か臨床かのどちらかに分けてしまうと、日常生活に影響する社会問題に対して私達が働きかけることは制限されてしまいます。近年、作業療法や作業科学は個々の人たちに焦点を当て始めました。人の生活を支える大きな社会構造に焦点を当てる人もいれば、作業的公正 (Stadnyk et al, 2011; Wilcock and Townsend, 2000)、作業的可能性 (Laliberte Rudman, 2010) といった重要な概念や理論を開発させる人もいます。また、地域

での社会世界や集合体としての作業の重要性 (Kantartzis & Molineux, 2017; Ramagundo & Kronenberg, 2013) に 焦点を当てる人も出てきました。

私が今日ここで皆様にお話しするのはこの社会世界に関することであり、私達がコミュニティや近隣地域で一緒に生きていく方法についてです。社会構造は法律、政策、組織に影響を与え、社会がうまく回るようにしていますが、それだけでは十分ではありません。家族がもつ信念や行動もまた重要となります。私はこの講演で地域という世界や集合体としての作業にフォーカスしていきます。これらは地域コミュニティの社会構造の本質を形作り、大きな公共機関や個人の経験を通して実践されています。

私の講演の目的は 4 つあります。

1. ソーシャル・インクルージョンについて、現代的な解釈を紹介する。
2. 地域の公共世界の中でのソーシャル・インクルージョンプロセス、人々の認識プロセス、参加市民権プロセスの重要性を論じる。
3. 集合体としての作業の紹介とこの地域社会の構築と維持に対する集合体としての作業の貢献について紹介する。
4. ソーシャル・インクルージョンのプロセスを促すために集合体としての作業をどのように使うか、例をあげながら考える。

ソーシャル・インクルージョンは複雑で多面的なトピックのため、ここでは部分的にしか議論できません。私の見解は私がヨーロッパで過ごした数十年が基本となっています。日本に関することもいくつかディスカッションに取り入れますがそれらは英語圏の社会で言われていることなので、実は関係がない、あるいは間違っているかもしれませんが、それも含めてディスカッションできればと思います。

まず、短い話から始めたいと思います。これはエルシトグループ (ELSiTO, Empowering Learning for Social Inclusion through Occupation) (作業を通してソーシャル・インクルージョンを学ぶ力を与える、メンタルヘルスサービスの欧州パートナーシップ www.elsito.net を参照) のある会員が話したことです。私達はソーシャル・インクルージョンの本質とプロセスを理解するために何年も一緒に取り組んできました。これはベルギーから来たルーシーという 35 歳の女性の話です。

「アート教室：絵画教室の最初の年。私は普通の仕事をもち、結婚し、子供のいる人たちのグループにいた。その人たちは精神的にとっても健康で、私の生き方とは全く違う；私は今まで多くの時間を同じ悩みをもつ仲間とともに私

達が受ける苦難に対処してきたが、普通の生活を送っている人と会うのも楽しいことがわかった。絵を描くことも楽しいが、レッスン後に一杯飲みに行くのが好きだ。たいていの場合、自分が受け入れられていると感じ、気分が良い。そういう時は希望を持ち、自分が社会から疎外されていないと感じる。アート教室の友達は私が精神疾患を持っているのを知っているが、みんなの中に入る方法がある。授業は集中的に行われ、一回 3 時間の集中力が必要で、いつも簡単に集中できるわけではない。しかしその後で飲む一杯は本当にリラックスでき、私は“普通の”人といっしょに時間を過ごすのを喜んでいる。」

この状況は私達の仕事でよく聞く話です。ルーシーのように精神疾患を持つ人は「自分は社会から除外されていない、自分にも社会の中に入る方法がある、人は私の病気を知っているが私を認めている、という希望をいだかせる」機会を一生懸命見つけようとしています。ルーシーはソーシャル・インクルージョンを実践しています。このソーシャル・インクルージョンとは我々全てが実践すべき重要なプロセスなのです。

私達は 2010 年、国連が提唱する「国の本当の富とは、国民とその国民がもたらす貢献である」ということを言葉では知っていますが、現実には私達の日常活動の多くで何らかの理由で排除されている人が世界中にいます。彼らは社会的な排除は法律や政策によって、また私達が持つ信念や態度によって長い間排除されており、それらは次の人達を指しています：女性、子供、高齢者、病気または異なる能力のある人、他の国籍や宗教、文化、性別をもつ人、貧困、ホームレス、薬物依存、失業中の人達などです。これらの人々は差別やスティグマを経験しています。

クレンショーが 1989 年に提唱した「インターセクショナルリティ」とは、人々が複数のアイデンティティを合体させて、差別や不利な立場の相互依存システムをつくるという概念です。このインターセクショナルリティとは、一つの特徴だけでなく、全部を考えないといけません。ルーシーは精神疾患を経験しており、失業中の女性ですが、教養があり想像力が豊かです。彼女の持つ多くのアイデンティティが、ルーシーは何ができて、どこで、どのように、どうなりたいたかに影響を与えています。ソーシャル・インクルージョンはそれらの問題のいくつかに取り組んでいます。現実はとても複雑で考えなければならない疑問が多々あります (Labonte, 2004)。

まず、1 つの疑問は、何にインクルージョンされるのか？ ソーシャル・インクルージョンに対する批判として、ソーシャル・インクルージョンは社会の本流から排除されている特定

のグループをサポートするために使われているのではないかということです。これは歴史的に多くの国で原住民や少数派グループに対して取られているアプローチです。

次の疑問は、だれが決めるのかです。ソーシャル・インクルージョンを推進する政策は主に政府や権力者によって制定されました。しかし、その権力者達、つまり同じ人たちが作った他の政策も誰かを排除するかもしれません (Labonte, 2004)。社会の主流に入りたくない人やグループはどうでしょう？

「どれだけインクルージョンされれば充分なのか？」を誰が決めるのでしょうか？すでに排除されているグループをもっと社会に取り込むようにサポートすると、今度は排除されかけている他のグループの立場が悪くなるような危険はありませんか？

全員が全員をインクルージョンするのか？社会は常にあるグループを排除しているのでしょうか？権力者によって変えられることに抵抗があるかもしれないし、排除は自分の利益を優先する人によってわざと行われているのかもしれませんが (UNDESA, 2009)。

益々社会が多様化する中で、複雑性をどのように管理していくのでしょうか、例えば、人口の移動や多くの言語、宗教、文化、伝統をもつ都市などがそうです。

このように多くの疑問はありますが、ソーシャル・インクルージョンの主たる考えは明らかです。ソーシャル・インクルージョンの定義は、プロセスであり、ユートピアな幻想ではありません。すべての人が変わる必要があり、他人が作った社会に同化する事ではありません。批判的で、振り返りのアプローチであり、自分自身の態度や信念に必要なことです (Gerlach, 2015; Kinsella & Whiteford, 2011)。全ての人のための社会に向かって働きかけるプロセスで、全ての人の尊厳、価値観、重要性、倫理的な規範や道徳的要請だけでなく法の原則、社会的な規範、究極的な実践として認識するプロセスです (UNDESA, 2009, p. 5)。これは複雑で多面的なプロセスであり、有効な考え方であり、作業の重要性を高めるでしょう。

インクルージョンの範囲

まず、構造が重要になります。ルーシーの件では、政策や法律が通常で不利をこうむっている人をインクルージョンすることを促し、コミュニティにあるアート教室に参加することを勧めています。ソーシャル・インクルージョンとは権利であり、社会正義を手に入れることと考えられるかもしれません。1990年代よりインクルージョンや統合の推進が国連の政策の中心となっています。直近では、2015年の国連による持続可能な開発目標に挙げられた17項目の中心

となっている理念が“誰ひとり取り残さない” (UN, 2015) です。また、ヨーロッパでは2017年の「欧州における社会権の柱」の設立が挙げられます。これは欧州委員会の公約を更新したもので、ヨーロッパにおける経済や社会の発展に対して、全ての人が基本収入、家屋、サービスへのアクセスを通してインクルージョンを推進するということです。ヨーロッパの国々は法律的には結ばれていませんが、このようなガイドラインは国の政策における方向性を示します。日本でも同じような法律や政策があると思います。

しかし、ソーシャル・インクルージョンは主観的な経験でもあります。ルーシーはアート教室でどのように普通の人の中に入り、教室の人達はルーシーの精神障害をどのように知っていながら教室で一緒に時間を過ごし、その後みんなと一緒にリラックスするのがどんなに素晴らしいかを語っています。他のエルシトメンバーは、“あなたはスティグマ（汚名、不名誉の意味）ではないと感じる必要がある”と言います。私達は皆、客観的には適応できているように振舞えるが、主観的には排除されていると感じる時があり、ソーシャル・インクルージョンはその構造的側面と同様に、インクルージョンされるという主観的な経験も考慮に入れなければなりません (Ammeraal, Kantartzis and Vercruyse, n.d.)。

三つ目は日々の生活の中で他の人達と一緒にいき、その中で関係を築くことです。社会的な標準や行動としてソーシャル・インクルージョンの定義を考えると、私達は批判的な視点をもって、近所やコミュニティでどのように一緒に生活していくかをより地域的なレベルで見えていく必要があります。これは吉田 (2003, n.p.) が提唱する「世間」という日本の概念と同じで、「日常生活を共に営む人々のコミュニティ」として家族や親しい友人、またはよく知らない人達の間で行われていますが、どのようにうまく一緒にやっているのでしょうか？

日常生活での排除の経験

障害をもつ人は、仕事や社会で同僚や近所の人から自分を非難するような態度をとるとよく言います (WHO, 2011)。アンゲルは、アメリカの学校の生徒の間でみられる教室で主導権を握る、またはそれを行動で示すような態度は、性別、人種、能力、年齢に関係すると2014年に報告しています。

日本でも今、インクルージョンは重要なトピックとなってきています。日常の人間関係やみんなと一緒にやっていくことの重要性を強調し、それを集合的な文化としてとらえる一方で、それがますます難しくなっています (Wado, 2011)。内閣府は1975年には人口の53%が近隣住民と親しい

関係であると報告していたのが、2007年には11%に減少しています(2007, cited Hommerich, 2015, p.49). 2000年より社会的不平等が増し、社会のネットワークが弱くなっており、「つながりのない社会、“無縁社会”」という言葉をつくりだしました(Hommerich, 2015, p.48). つながりが断たれたという感情や何かに帰属している、社会にとって自分は価値があるのだという意識が低下し、特に社会経済的に不安定な状況を考え合わせると、これでは市民が何か社会的に取り組もうとする気持ちを減退させてしまいます(Hommerich, 2015). また、2015年には日本での独居生活者は1845万人にのぼり、その内の593万人が65歳以上の高齢者だとの報告もあります(Statistics Bureau, 2017).

独居生活をあえて選択する人もいるでしょうが、それは孤独感につながり、コミュニティと一緒に何かを行う気持ちは低下します。イギリスの研究では、孤独は早期死亡やアルツハイマー病の発症と関係する、と報告されています(AgeUK, 2017). 日本では近所に対する不満、特に近所への信頼や安全性は、健康面で自己評価が低いことと関係しています(Oshio & Urakawa, 2012). 社会ネットワークや就職、それらの状況は、社会的な健康状態を決めるのに重要であると言えるでしょう(CSDH, 2008).

ここまで、私達は近所やコミュニティでの生活において全ての人をインクルージョンするためのプロセスを考えてきました。ここからは、このプロセスに集合体としての作業がどのように貢献するかについて考えていきます。

ソーシャル・インクルージョンのための3つのアイデア：公共の世界の構築、認識の重要性、参加市民権

この概念の基本は、人間は社会的な動物であるということを理解することです。多くの人はこれを直感的にわかっていますが、人類は社会協力というスキルを持つ共同グループとしていつも働いているとする研究報告もあります(Fukuyama, 2012).

公共の世界

最初に紹介するアイデアは「公共の世界」の重要性です。「ポリス」とは古代ギリシャの都市国家を意味しますが、都市建設の様な物理的な場所ではなく、市民が一緒になってコラボレーションや秩序を築き上げたもののことです(Aristotle, 出版地不明). このアイデアの創設者である社会理論学者、ハンナ・アーレントは様々なタイプの人間活動について言及しています(Arendt, 1958). その中の2つは労働と仕事で、本来は個人に限定されたものです。3つ目は行動で、アーレントによれば、我々の行動や言葉は一緒に結びついて行動や関係のネットワークをつくる、

これが「一般的な公共生活の世界」です。この公共の世界はアイデンティティや行動を家庭や職場を超えて表現するのに極めて重要です。そのような行動から排除された人のために、例えば、彼らも生き続けるために仕事が必要ですが、公共の世界から排除され、自分のアイデンティティや可能性を試すことができません。アーレントは、人はどのように一緒になって行動するのか、彼女が言う「本当の人の連帯感」はパワーを生み出し、このパワーとは私達が一つになった時に生まれる多様な力の結集であり、行動のための場所が生まれ、伝統的または独占的に敷かれている境界に対して行動を起こし、変化をもたらすという状態のことです(Allen, 2002). このように、「公共の世界」というアイデアは、個々の持つアイデンティティやスキル、可能性を発揮するための表現だけでなく、人々が一緒になって行動する場所を作るというパワーを生み出すためにも重要です。

認識

公共の世界では、公共の自己とは相関的な自己であるという意味であり、自分と他の人との関係が非常に重要です。ここで第2のアイデアとして「認識」という概念がでてきます。ナンシー・フレイザーとアクセル・ホネット(Frazer & Honneth, 2003)は哲学者であり、社会正義の概念を専門としています。彼らは、ソーシャル・インクルージョンは経済的な排除や階級に影響を受けた分配の問題に限らず、異なる社会グループとの関係性の問題であり、認識はこれらを明らかにすることに役立つと言います。哲学者ヘーゲルは「自己認識は他人から認識されることからのみ生れる。社会的な関係は個人よりも優先され、共同の主観性は個人の主観性よりも優先される。」と言います(Frazer & Honneth, 2003, p.10). もし認識を否定される、または誤って認識されたら、自己に対する関係はゆがめられ、アイデンティティが傷つきます(Frazer, 2000). 誤認識は法律や政策、専門家が実際に行うことでも起こり、また長期間社会で行われてきた事や文明社会(Frazer, 2000)または地域社会での慣習においても起こります。

フレイザーは「参加の平等性」について、正義とは「全ての成人は同等として互いに作用しあう」という社会の取り決めが必要だと言います(Frazer & Honneth, 2003, pg. 36). ホネットは、3つの領域において認識が重要であり、それは愛と愛する者からの気をかけられること、自分の権利に対する法律の認識、自分が生産的な市民として達成したものに対する認識の3つです(Frazer & Honneth, 2003, pg. 141).

ソーシャル・インクルージョンのプロセスにおける認識とは、

資源の再分配（例えば、貧困に対する政策）だけでなく、アイデンティティをとりまく不公正な状態を明らかにすることでもあります。これは社会において参加の平等性を妨げ、自己のアイデンティティを変えてしまうようなことであり、他の人と違う、または文化的価値観による違いなどが現状を不安定にすることとなります（Honneth & Fraser, 2003）。

これらは、人が一緒になって作り上げた社会が公共の世界の本質を形作っており、その中で私達が認識することが3つ目のアイディア、参加市民権です。

参加市民権

市民権は世界中の国でそれぞれ理解されています。その国独特の社会歴史的な歩みによりますが、参加市民権の概念は EU、ヨーロッパ連合でごく最近に提案されました。参加市民権は、文明社会、コミュニティ、そして／または政治活動への参加、と定義され、これらは相互尊重、非暴力、人権、民主主義と一致するという特徴があります（Hoskins et al, 2012, pg.4）。ここで言う市民権とは国と人の関係という法的な状態ではなく、それは能動的な参加や一緒に生活することや私達の共通世界の形成を表し、集合体としての作業のアイディアを反映します。これは日本における市民権の考え方とよく似ており、市民活動、モラル、社会的責任と関連しており、例として生徒が学校生活や委員会にかかわることなどが挙げられます（Davies et al, 2010）。

これは私達全員が参加できる市民権であり、そこではみんなが共有できる世界を構築するために全員が貢献する、これがアーレントの言う「行動」の実践です。この参加市民権の概念を「集合体としての作業」に取り入れ、さらにそこでは特定の作業の重要性やボランティアワーク、政治活動、地域の委員会への参加だけでなく、私たちの関係や市民としての役割も含みます。これは自分を市民として自覚し、各々が仲間の市民の立場を決め、我々が共有する世界の本質を決める責任があるということです。作業療法士の場合を考えると、クライアントとセラピストという同等でない力関係から起こる難しい関係に対して代替案を考え、私達は初めて出会う市民どうしの仲間である、と認識するなどです（Fransen et al, 2015）。

ここまで、ソーシャル・インクルージョンのプロセスを理解するために、公共の世界、お互いを認識し合う、参加市民権という概念の重要性を話してきました。また、社会構築のために我々が一緒に行うことの重要性和これらがどのようにつながるのかも考えてきました。次に、このみんなで一緒に行うこと、集合体としての作業について、詳細

をお話していきます。

集合体としての作業

集合体としての作業の定義はいろいろありますが、私は「係わる多くの人々やそこから生み出される力を通して独自に構築されるものであり、社会構造に対しての意思や目的である。」という定義を提案します（Kantartzis & Molineux, 2017, p.173）。これは一緒に集まった人々の多様性からのみ起こる作業です。一緒に集まることにより生まれるパワーが我々の共有する社会を形作るということです。この形が我々の仲間市民を排除や差別しているかもしれませんが、集合体としての作業を通して人は一体になることができます。

この例として、日本の「お花見」があります。この行事や醸し出す雰囲気は人が毎年集まった時に起こります。人々が一緒になって毎年行われる強力な伝統的レクリエーションとなり、人々の経験、象徴、思い出となります。

フォーゲルバーグとフラウワースが提唱する（Fogelberg and Frauworth, 2010）「分配された作業」は、ある作業は大多数の人々が一緒になったときのみ可能であると言えます。例えば、国民の祝日やスポーツイベントなどの作業は、人口、コミュニティ、グループ、個人という4つのレベルで行われます。もっと最近ではザンゴ・マーチンら（Zango Martin et al, 2015）が、世界の多くで毎日行われる作業はほとんどが社会行動であると報告し、一方でペラルタ・キャチポン（Peralta-Catipon, 2012）は、集合体としての作業として、移民の人達がどのように新しい国で自分たちが慣れている元の国の社会構造や人間関係や行動を再構築していくかを報告しています。

一緒に行うことの重要性は、ますます注目されてきました。社会に対する意識を考えると、ラムゴンドとクロネンバーグ（Ramugondo and Kronenberg, 2013）の「人間関係は集合体としての作業の意思である」という言葉を思い出します。それは、個人とコミュニティがどのようにお互いに影響しあい、お互いに責任を持っているかを述べています。関係性における集合体としての作業を考えると、集合体としての作業を通して維持される関係とは、ポジティブと抑圧的の間にどんな風に位置しているのかを考えます。

そのためには、批判的アプローチが必要であり、それにより集合体としての作業を通してつくられた社会的な世界の本質を認識することができます。「実際の行動」としてのソーシャル・インクルージョンを認識することが重要となります（UNDESA, 2009）。私達が認識する、しないにかかわらず、私達の集合体としての作業の行動や言葉がインクルーシブになるか、排除的な行動になるかを決めて

いきます。

集合体としての作業は、様々な形があり、エルシトのメンバーの引用をここで紹介します。「本当に素晴らしいのは、道を歩いて誰かに“こんにちは”と言えることである。」なんとシンプルなリクエストでしょうか。しかし、これは都市部ではどんどんまれになってしまった行動で、ますます独居者が増え、彼らにとってこれは重要なこととなっています。

公共の場での非公式な出会い

道を歩くことは、公共の場では非公式な出会いの一つで、研究でもこれは集合体としての作業の一つの形であると言われています (Kantartzis, 2017)。近くの町や村で近所の人や他人との毎日の出会いを通して私達は作業のネットワークを構築します。これは社会的なネットワークだけでなく、作業のネットワークの構築です—いつも買い物をする場所、車の修理、美容室に行く、ベビーシッターや医者を見つけるなどです。私達はみんなにそのような場所を勧めます、だれかがヘルプやアドバイスを必要としており、自分もヘルプやアドバイスが必要なかどうかを考えます。ここで、何をして、どこで、いつ、だれと一緒に作業を通して形作ることかを考え、知識やスキル、製品やサポートを交換し、認識しあい、切っても切れない地域社会の一部であるというアイデンティティを持ちます (Arendt, 1958; Hammell, 2014)。

日常生活の中の可能性を試しながら、そのような非公式な出会いから、近所という社会の場所との関係をつくるのが特に大切となります。我々は物理的な場所やイデオロギー、伝統の組み合わせから近隣をつくり、近隣の中で日常の作業を営んでいます (de Certeau, Giard and Mayol, 1998)。

この作業のネットワークに参加するためには、私たちは価値があり何か貢献できる個人として認識され、出会い、知りあうことが必要です。物理的に公共の場所にアクセスできる、例えば道を歩く、店に行くなどが安全に行えなければなりません。法的にも公共の場所にアクセスできなければなりません。例えばある国では女性が公共の場から排除されています。同時に、社会経済的な排除は、貧しい人が高級レストランやバーへのアクセスをその店の値段やスタイルを理由に妨げています。

作業のネットワークは人を排除したり、取り込んだりします、例えば「あの人はいい人だとか正直な人で家を改装するなら推薦する改装業者だ」と誰かがお墨付きを与えたり、公共の場での行動を支持するような標準や社会的な価値観によってそれらが起こるかもしれません。例えば、

近所に住む障害を持つ人について私たちがどのように話すかなどです。ルーシーは精神障害があるにもかかわらず、アート教室の仲間に教室後の一杯に参加することを認められて参加していたのを思い出してください。

ここまではアーレントが言う非公式な出会いや公共社会の行動や発言について集合体としての作業、そして認識の重要性もみてきました。しかしながら、公共の場での集合体としての作業はより構造的な形態をとる場合もあります、公共の行動をオーガナイズするために公式、非公式の団体を作るなどがそれにあてはまります。

組織や団体での集合体としての作業

地域団体は近隣やコミュニティでよく見られ、地域で必要なものや興味あるものを明らかにし、毎日の出会いや会話がそこで生まれます。いろいろなものがあり、地域でのビジネスを組織化するもの (例：農協)、特定団体の支援 (例：女子会)、特定のレクリエーション活動 (例：陸上連盟、民族団体) があります (Kantartzis, 2017)。日本にも 3000 以上の町内会が存在します (Pekkanen, Tsujinaka & Yamamoto, 2014)。これらの地域団体は外から見えて、認められ、何か役割を担う、スキルを使う機会を作るのに重要で、全員に共通する良いもののために貢献し、地域行事に影響を与えます。これは職場や家庭ではできない機会です。

ここでは、私達はこれらの団体がどのように社会組織を整理しているか、公共の世界を組織しているかという点で集合体の力を考えます。しかし、批判的なアプローチによってそれらが地域の全住民が抱える問題すべてを明らかにしていない、ある人たちを排除しているかもしれないことが見えてきます。例えば、性同一性障害の人が男性または女性オンリーのメンバーシップ団体に入ることはどうなのでしょう。また、ある団体は会員のスキルや能力に対する期待からある人たちを除外しているかもしれません。

より非公式な組織の行動として、新しい挑戦をしたり、期待していない出来事に対処することもあります。フランクとミューリッチ (Frank and Muriithi, 2015) はアメリカにおける市民権運動を集合体としての行動の例として挙げており、それはアメリカの黒人生活をもっといいものに変えようというものでした。団体は地域行事や危機に対応するために活動をその場に適応させることもあります。その例として、椎野と長谷川 (Shiino and Hasegawa, 2017) は福島県で起きた東日本大震災後災害支援活動における作業療法士の対応を挙げています。作業で重要なのは、集合的な感情という考え方であり、これが集合体としての作業の 3 つ目の形です。

祝賀行事や記念式典での集合体としての作業

次は、感情を共有するということが中心となる集合体としての作業についてです。分配された作業という考え方を反映して、多くのグループが生産に携わっています (Fogelberg and Frauworth, 2010)。しかし、ここではどのように彼らがつくっているかよりも、高まって強くなった感情を経験することが重要です (Von Scheve & Ismer, 2013)。

世界中のコミュニティで年中または季節の行事があり、宗教や歴史的な行事を祝うものもあれば、哀悼の意を共有したり、国または地域で起こった悲劇を追悼する機会もあります。伝統的な儀式があまり行われなくなったところでは、高まる集合体としての感情を別の形で表すこともあります。例えば、スポーツ観戦の群衆やポピュラー音楽のコンサートなどが挙げられます (Getz, 2007)。集合体としての作業とともに、行動の共有、象徴行事やその再現は、グループの結合力や団結を強くして (Collins, 2004)、帰属意識をつくります。

ここまで 3 つの形の集合体としての作業についてお話してきました：公共の場所における非公式な出会い、組織や会社、祝賀行事や記念式典です。それぞれ別々に話してきましたが、現実にはこれらは頻繁にオーバーラップしています。例えば、毎日の出会いで近所の人たちが一緒にすることで、地域で必要なものが明らかになり、新しい団体の設立へとつながっていきます。集合体としての感情の力は、変化のための行動を支持します。例えば、アメリカの市民権運動や最近の平和のための行進などです。

集合体としての作業は人々が物理的に一緒に集まるということを主に話してきました。しかし、仮想の世界でも集合体としての作業は世界中で行われています。例えば、サッカーのワールドカップ観戦もその例で、ゲームはある特定の国で行われますが、関連する作業、そこでの経験と意味はメディアを通して世界中の多くの人に伝わります。

そして、集合体としての作業の重要性を認識したら、それが形作る社会的な世界の形を考える必要があります。その社会的な世界は力強いのか、活気に満ちているのか、インクルーシブかどうかを考えなければなりません。

集合体としての作業の開発

このお話の最後は、集合体としての作業を通してどのように活気に満ちた、インクルーシブな近所やコミュニティをつくるために私達はどのようなサポートができるかをヨー

ロッパで開発されているプロジェクトの例を挙げながら考えます。

その前に、ちょっと時間を取って、あなた自身の集合体としての作業、毎日の出会い、団体へのかかわり、感情を共有する機会、そしてここでは挙げていない他の形について考えてみてください。あなたにとって大切な要素は何でしょうか？そこにいない人は誰でしょうか？関わっていない人は誰でしょうか？どのように、そしてなぜその人たちは排除されているのでしょうか？彼らに関わり、インクルージョンされるためのサポートをどのようにすればいいかを考えてください。

インクルーシブな公共の場所を開発する

インクルーシブな公共の場所を開発するために私達はどうかすればいいのでしょうか？物理的にアクセスできて、安全で、公共の場所をつくるのが最初の重要なステップです。シーモン (Seamon, 2006) は “place ballet, 社交場” という言葉を使い、その場所は定期的な時間に環境的に常設の場所であることが必要で、人々がお互いを知り、何かを一緒にできる場所を強調しています。人がどこでいつ定期的に会えるかを考えるべきで、例えば地域にあるお店、毎週開催される市場、宗教的なサービス、定期的な作業場などがあてはまります。ルーシーは毎週アート教室に行きました。しかし、私達の地域コミュニティでみんながインクルーシブな公共の場所に定期的に行くことができますか？私達はそのような場所を作る必要があります。

また、人が何かに帰属している、自分も含まれているという意識を高める雰囲気をつくらなければなりません。雰囲気を高めるものとして：毎日提供され、テーブルと椅子があり、みんながその場に入れて使いたいように移動でき、開催時間の変更可能で、定期的に参加している人がいて、知り合いになれる、が挙げられます (Kantartzis, 2013; Oldenberg, 1999)。

意識啓発

そのような場所を作るだけでなく、私達は一緒にやっているんだということや対人関係の重要性に対する意識を高める必要があります。対人関係の意識はある文化では強く存在します。例えば、ウブントウのアフリカ道徳観（他人への思いやり）がそうです (Ramagundo and Kronenberg, 2013)。あるコミュニティの伝統的な特徴、例えば精神疾患を有する人は危ないという共通した考えは彼らを差別し排除するでしょう (Hamer et al. 2017)。ルーシーも彼女の精神疾患についての起こりえるスティグマに気づいていました。

アーレントの公共の世界は言葉と行動によって築かれており、人が一緒にいなければ抑圧や不公正の問題に対する意識が高まる可能性もあります。実践主義者であるジョン・デューイはディベートや議論、説得の機会を作ることの重要性を説き、それがコミュニティに変化をもたらすといいます (Cutchin et al, 2017)。パウロ・フレイレ (Paulo Freire, 1996) は、変化のための行動には意識化のプロセスが必要で、この振り返りのプロセスが既に築かれた社会現実の本質に関する知識を共に作ることを可能にするといいます。我々の関係性の質、全ての人の尊厳に敬意を示すこと、同じ市民として他人を知ることの重要性に気づき、感謝することが重要です。

私達が使う言語を意識するのも大切です。言語が、権力や権威や法律を作り、議論を生み、作り直し (Taket et al. 2014, p.4)、地位が作られ、言語を通じて挑戦を受けるのです。

集合体としての作業への関わり

これらのプロセスは、集合体としての作業と一緒にあって、または集合体としての作業と統合されていくかもしれません。毎日の小さな行い、挨拶、小さな親切、共有、毎日の出会いが重要です (Ammeraal et al. 出版地不明)。これらとともに、集合体としての作業にもっと深くかかわる機会を作ることも大切です。日本での研究として、近所でボランティア活動を行うことと主観的な健康には正の関係があると報告されています (Tiefenbach and Holdgrün, 2015)。団体または伝統的な祝い事を通してボランティア活動や何かに関わることは、作業に関わる経験を共有する、自分のスキルを磨く、社会とのつながりや帰属意識を経験する、地域のコミュニティに貢献する、地域の政策の開発に貢献するなどの機会を生み出します (Ripat et al. 2010)。

これは境界の外に追いやられた人を大多数の活動に参加させるだけではありません。私達と一緒にやるための新しい方法を開発し、現代社会に必要なものに対して新しい集合体としての作業を開発するためにどのように作業を再構築するかを考える必要があるでしょう (Frank, 2015, 2017, in press)。

ここで、インクルーシブなコミュニティをサポートするために開発された集合体としての作業の例を示します。それらは 3 つの形を織り交ぜています。日本にもそのようなプロジェクトが開発されていると思いますが、これらの例が皆さんの地域活動の参考になればと思います。

ベルギー、ルーベン市のカフェ「ポルパロル」

このカフェは、「リラックスした、構造的でない環境で、人と出会うというチャレンジ」の場としてつくられました。毎週木曜日の夜、カフェ「ポルパロル」でのミーティングで、職業についていなくて地域に独立して住んでいる精神的な問題を抱える人や移民、近所の人が運営しています。この「社交場」は定期的なミーティングを行う場所と時間のためだけでなく、非公式な出会い、人が立ち寄る場としても重要です。参加者はスタッフや地域の作業療法プログラム (HuB Brussels) の学生といっしょにカフェに来る全員がカフェの管理や社会的行事の運営にかかわるように奨励されます。彼らはこの非公式な集合団体の一員となり、新しいスキルを学びます。バーベキューや社会活動を計画し、多くのスキルを身につけ、自信や帰属意識が芽生え、感情を共有します。(www.elsito.net 参照)

ドイツ、ヒルデスハイム市の都市型ガーデニング

このプロジェクトはドイツのヒルデスハイム市にある過疎地域での大学とコミュニティのコラボレーションとして開発されました。そこでは学生と地域住民が一緒になって話し合いながら花壇をつくり、そしてそれが地域コミュニティの中心となっています。ここでも一緒に「行うこと」の重要性がわかります。集団としての作業が、人々に出会いと協働をもたらし、エンパワーメントの意識と自己効力感を高めるのです。この集合体としての組織が地域で必要としているものを明らかにし、環境維持に向けた草の根運動としてこの都市型ガーデニングが存在しています。(Schiller et al, in press)

ベルギー、ルーベン市、「足場の中の芸術」

地域に根ざしたプロジェクトは、幅広いクリエイティブな作業に集合体として関わることのパワーを示しています。物理的にも感情的にも地域コミュニティと一体となって行われています。1年に一度、地元のもう使われていない教会でイベントが開催されます。この恒例行事は地域にある精神保健センター、小中学校、教会や地域評議会メンバーの協働で組織されています。地域全員が参加し、絵画や図画、詩の朗読、ビデオアートなどのクリエイティブな表現を、年間を通して準備して、公開されます。(Kunst in de Steigers, www.elsito.net 参照)

結論

今回の講演は、集合体としての作業がソーシャル・インクルージョンにどう貢献しているかを説明してきました。ソーシャル・インクルージョンは複雑でダイナミックです。それ

は多くのレベルによって影響を受けており、大きなものでは法律や政策の構築レベルから一個人の経験という主観的なレベルまでを含みます。ダイナミックなプロセスゆえに、インクルージョンの構築はその状況や瞬間によって変わります。人種、障害の有無、言語、性別、年齢、貧困など多くの要素が入り混じっています。すべての要素は偶発的で、それぞれの面が他に影響を及ぼし、一つの変化は他の変化へとつながっていきます。

ここまで、地域やコミュニティでの公共の世界はインクルージョンのプロセスを開発するために重要であると話してきました。多くの人が経済政策や権力の使用、乱用、行使、または雇用の重要性の過小評価により排除されていることは無視できません (Labonte, 2006, p.118)。しかし私達が実践しているアプローチは地域レベルでの変化のために必要なものをサポートしています (Carpenter, 2009)。集合体としての作業はそのようなプロセスにとって重要な構成要素です。お互いが市民として行動を共にし、毎日の生活と一緒に関わり、個々の人を認識し、彼らの貢献の可能性を認識し、我々の社会の状況を作っています。能動的にコミュニティに関わり、自身の排除の価値や行動を批判的に発言することが全ての人を活気づけるサポートとなります。

ソーシャル・インクルージョンは結果ではなくプロセスであり、私達が毎日の生活を通して継続的にかかわる必要のある仕事です。ルーシーや他の排除されている人の責任ではなく、我々全員、専門職、学者、研究者、市民として、すべての人にかかっています。複数のレベルでの働きが必要で、それは個人から社会構造にまで及びますが、変化を求める作業の力が極めて重要です。集合体としての作業の力を利用することは、私達全員のインクルージョンを確かなものにするために必要な社会変化を可能にすることでしょう。

文献

- Age UK (2017). *Later Life in the United Kingdom*. https://www.ageuk.org.uk/Documents/EN-GB/Factsheets/Later_Life_UK_factsheet.pdf?dtrk=true 参照日 2017.7.2.
- Allen, A. (2002) Power, subjectivity, and agency: Between Arendt and Foucault. *International Journal of Philosophical Studies*, 10(2),131-149.
- Ammeraal, M., Kantartzis, S. & Vercruysse, L. (Eds.) (n.d.) *Doing Social Inclusion*. Amsterdam: Uitgeverij Tobi Vroegh – Sebastian Tijsma. www.ELSiTO.net 参照日 2016.10.2.
- Angell, A. M. (2014). Occupation-centered analysis of social difference: Contributions to a socially responsive occupational science. *Journal of Occupational Science*, 21, 104-116.
- Arendt, H. (1958). *The Human Condition* (2nd ed.) Chicago: The University of Chicago Press
- Aristotle. (n.d.) Politics. Book III. <http://classics.mit.edu/Aristotle/politics.3.three.html> 参照日 2017.9.2
- Carpenter, M.(2009). *The capabilities approach and critical social policy: Lessons from the majority world? Critical Social Policy*, 29(3),351-373.
- Collins, R. (2004). *Interaction ritual chains*. Princeton: Princeton University Press.
- Commission on Social Determinants of Health (CSDH) (2008). *Closing the gap in a generation: health equity through action on the social determinants of health*. Final Report of the Commission on Social Determinants of Health. Geneva, World Health Organization.http://www.who.int/social_determinants/final_report/csdh_finalreport_2008.pdf 参照日 2015.9.14
- Cutchin, M.P., Dickie, V. & Humphrey, R. (2017). Foregrounding the transactional perspective's community orientation. *Journal of Occupational Science*, 24(4),434-445.
- Davies, I., Mizuyama, M.& Hampden Thompson, G. (2010). Citizenship education in Japan. *Citizenship, Social and Economics Education*, 9(3),70-178.
- De Certeau, M., Giard, L. & Mayol, P. (1998). *The Practice of Everyday Life. Vol 2: Living and Cooking (trans. T. Tomasik)*. Minneapolis: University of Minneapolis Press.
- Crenshaw, K. (1989). Demarginalizing the intersection of race and sex: a black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *The University of Chicago Legal Forum*, 140,139-167.
- Empowering Learning for Social Inclusion through Occupation (ELSiTO) (n.d.) Website. www.elsito.net
- Empowering Learning for Social Inclusion through Occupation (ELSiTO) (n.d.a) *Stories of work. Leisure*. <http://elsito.net/?cat=4> 参照日 2017.9.8.
- European Commission (2017). *Commission recommendation of 26.4.2017 on the European Pillar of Social Rights*. C (2017) 2600 final. file:///C:/Users/TOSHIBA/Downloads/C(2017)%202600_1_EN_ACT_part1_v6.pdf] 参照日 2017.7.2
- Fogelberg, D. & Frauworth, S. (2010). A complexity science approach to occupation: Moving beyond the individual. *Journal of Occupational Science*, 17, 131-139.
- Frank, G. & Muriithi, B. (2015). Theorizing social transformation

- in occupational science: the American civil rights movement and South African struggle against apartheid as 'occupational reconstructions'. *South African Journal of Occupational Therapy*, 45, 11-19.
- Frank, G. (2017). Collective occupations and social transformation: A mad hot curriculum. In D. Sakellariou & N. Pollard (Eds.) *Occupational Therapies without Borders: Integrating justice with practice*, 2ed. Edinburgh, Elsevier Science, pp. 596-604.
- Frank, G. (in press). Social transformation in theory and practice: Resources for radicals in participatory art, occupational therapy and social movements. In H. van Bruggen, S. Kantartzis, N. Pollard (Eds.) *'And a seed was planted ...' Occupation based approaches for social inclusion*. London: Whiting & Birch
- Fransen, H., Pollard, N., Kantartzis, S. & Viana-Moldes, I. (2015). Participatory citizenship: A critical perspective on client-centred practice. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 22, 260-266.
- Fraser, N. (2000) Rethinking recognition. *New Left Review*, 3, May-June.
<https://newleftreview.org/II/3/nancy-fraser-rethinking-recognition> 参照日 2017.9.20.
- Fraser, N. a& Honneth, A. (2003). *Redistribution or Recognition*. New York: Verso
- Fukuyama, F. (2012). *The origins of political order*. London: Profile books
- Gerlach, A. (2015). Sharpening our critical edge: Occupational therapy in the context of marginalized populations. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 82,(4),245-253.
- Getz, D. (2007). *Event studies: Theory, research and policy for planned events*. London: Routledge
- Hamer, H.P., Kidd, J., Clarke, S., Butler, R. & Lampshire, D. (2017). Citizens un-interrupted: Practices of inclusion by mental health service users. *Journal of Occupational Science*, 24(1), 76-87.
- Hammell, K.W. (2014). Belonging, occupation, and human well-being: An exploration. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 81(1), 39-50.
- Hommerich, C. (2015). Feeling disconnected: exploring the relationship between different forms of social capital and civic engagement in Japan. *Voluntas*, 26, 45-68.
- Hoskins, B., Abs, H., Han, C., Kerr, D & Veugelers, W. (2012). *Contextual Analysis Report. Participatory Citizenship in the Europe Union*. Brussels: European Commission, Europe for Citizens Programme.
- Kantartzis S. (2013). *Conceptualising occupation: An ethnographic study of daily life in a Greek town*. Leeds: Leeds Metropolitan University.
- Kantartzis, S. & Molineux, M. (2017). Collective occupation in public places and the construction of the social fabric. 84(3), 168-177.
- Kinsella, E.A. & Whiteford, G. (2009). Knowledge generation and utilization: Toward epistemic reflexivity. *Australian Occupational Therapy Journal*, 56, 249-258.
- Labonte, R. (2004). Social inclusion/exclusion: Dancing the dialectic. *Health Promotion International*, 9(1),115-121.
- Laliberte Rudman, D. (2010). Occupational dialogue: Occupational possibilities. *Journal of Occupational Science*, 17, 55-9.
- Oldenburg, R. (1997). *The Great Good Place*, 2nd ed. Cambridge, MA.: Da Capo Press.
- Peralta-Catipon, T. (2012). Collective occupations among Filipina migrant workers: Bridging disrupted identities. *Occupational Therapy Journal of Research*, 32, 14-21.
- Oshio, T. & Urakawa, K. (2012). Neighbourhood satisfaction, self-rated health, and psychological attributes: A multi-level analysis in Japan. *Journal of Environmental Psychology*, 32, 410-417.
- Pekkanen, R., Tsujinaka, Y. & Yamamoto, H. (2014). *Neighbourhood Associations and Local Governance in Japan*. London: Routledge.
- Peralta-Catipon, T. (2012). Collective occupations among Filipina migrant workers: Bridging disrupted identities. *Occupational Therapy Journal of Research*, 32, 14-21.
- Ramugondo, E. and Kronenberg, F. (2015). Explaining collective occupations from a human relations perspective: Bridging the individual-collective dichotomy. *Journal of Occupational Science*, 22, 3-16.
- Ripat, J.D., Redmond, J.D. & Grabowecky, B.R. (2010). The winter walkability project: Occupational therapists' role in promoting citizen engagement. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 77(1),7-14.
- Schiller, S. with Auracher, F., Bode, K. Buttlar, H-J., Constabel, V., Koselleck, U& Liebig, C. (in press). The transformative potential of urban gardening. In H. van Bruggen, S. Kantartzis, & N. Pollard (Eds.) *'And a seed was planted ...' Occupation based approaches for social inclusion*. London: Whiting & Birch
- Shiino, Y. & Hasegawa, K. (2017). Disaster support activities after the great East Japan Earthquake in Fukushima. In

- D. Sakellariou & N. Pollard (Eds.) *Occupational Therapies without Borders: Integrating justice with practice*, 2ed. Edinburgh, Elsevier Science, pp.506-512.
- Seamon, D. (2006). A geography of Lifeworld in retrospect: A response to Shaun Moores. *Participation*, 3, 2, 1-20.
http://www.participations.org/volume%203/issue%202%20-%20special/3_02_seamon.htm] 参照日 2017.9.3
- Stadnyk, R., Townsend, E. & Wilcock, A.A. (2011). Occupational justice. In C. Christiansen & E. Townsend (Eds.), *Introduction to Occupation: The art and science of living*. Upper Saddle River, NJ: Pearson, pp. 329-58
- Statistics Bureau (2017). Statistical handbook of Japan 2017
<http://www.stat.go.jp/english/data/handbook/c0117.htm>] 参照日 2017.10.15
- Taker, A., Crisp, P., Graham, M., Hanna, L. & Goldingay, S. (2014). Scoping social inclusion practice. In A. Taker, L. Hanna, S. Goldingay & L. Wilson (Eds.), *Practicing Social Inclusion*. Abingdon, Oxon: Routledge, pp.3-42
- Tiefenbach, T. & Holdgrün, P.S. (2015). Happiness through participation in neighborhood associations in Japan? The impact of loneliness and voluntariness
- VOLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations, 26, 1, 69-97.
- United Nations Department of Social and Economic Affairs (UNDESA) (2009). *Creating an Inclusive Society: Practical strategies to promote social integration* <http://www.un.org/esa/socdev/egms/docs/2009/Ghana/inclusive-society.pdf>] 参照日 2016.12.2.
- United Nations (2015). *Sustainable development goals*.
<http://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/>] 参照日 2017.10.12.
- United Nations (2010). Human Development Report 2010. The Real Wealth of Nations. Pathways to Human Development.
http://hdr.undp.org/sites/default/files/reports/270/hdr_2010_en_complete_reprint.pdf] 参照日 2016.12.2
- Wado, M. (2011). Strengthening the Kawa model: Japanese perspectives on person, occupation, and environment. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 78, 230-236.
- World Health Organisation (WHO) (2011). *World Disability Report*. Geneva: WHO http://www.who.int/disabilities/world_report/2011/report.pdf] 参照日 2016.12.2
- Wilcock A. A. & Townsend, E. (2000). Occupational justice: Occupational terminology interactive dialogue. *Journal of Occupational Science*, 7, 84-86.
- Yoshida, M. (2003). The reluctant Japanese litigant: A 'new' assessment. *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*. Discussion paper 5. <http://www.japanesestudies.org.uk/discussionpapers/Yoshida.html>] 参照日 2017.10.12
- Von Scheve, C. & Ismer, S. (2013). Towards a theory of collective emotion. *Emotion Review*, 5, 406-13.
- Zango Martin, I., Flores Martos, J., Moruno Millares, P. & Björklund, A. (2015). Occupational therapy culture seen through the multifocal lens of fieldwork in diverse rural areas. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 22, 82-94.

Perspectives on occupation-based social inclusion

Collective occupation in the local, social world

Sarah KANTARTZIS, Dr., Senior Lecturer

Queen Margaret University, UK

Abstract

The construction of our social worlds through historical, social, cultural, and economic conditions has placed some people in un-just positions; positions which exclude them from full participation in the daily lives of their families and communities. The term social inclusion is used to describe a process that works to transform our societies, to re-construct 'societies for all'. However, this is a complex and multi-layered process, requiring change by all. While policy and economic change is an essential part of this, it is also recognised that change in the locally social world, the public world of the neighbourhood and community, is significant. I suggest that collective occupation, and our research and practice of collective occupation, is an important part of these processes.

Following a general introduction to social inclusion, my first aim in this paper is to present the concept of collective occupation and its contribution to the construction and maintenance of the locally social world, including situations of both inclusion and exclusion. Following this I aim to discuss how collective occupation that supports social inclusion may be developed, including examples from Japan and Europe. Integral to this development is understanding of the importance of the public world, and the concepts of recognition and participatory citizenship. Enabling the social inclusion of all in our local neighbourhoods and communities through collective occupation can be part of the social transformation required to address the un-just conditions of many people's lives in our societies today.

Japanese Journal of Occupational Science, 12, 14-37, 2018.

Keywords: Collective occupation, Participatory citizenship, Public world

It is a great honour to be here today, invited to join you at the 21st Occupational Science Seminar, and to be back in Japan following my first visit in 2014 to attend the World Federation of Occupational Therapists' congress, which was such a wonderful introduction for me to your country. It is exciting to be here and to be able to share with you ideas about the importance of occupation in tackling some of the problems facing our societies today.

Social inclusion is complex with different and conflicting

representations. In essence, we are talking about how we can transform how we live together. This is transformation based on an understanding of socially constructed reality; that is, reality constructed by historic, social (including cultural and economic) circumstances, that place some people in un-just conditions. These un-just conditions include limitations to their possibility to participate in occupations that are available to other members of their community or society, and thereby limitations to their possibility to be healthy and to flourish.

If the focus of our work, whether in research or practice, remains on the individual person and assumptions regarding their agency, our ability to work with those social conditions influencing their daily lives is limited. Recently, occupational therapy and occupational science has begun to address this traditional focus on the individual. Some work has focused on the macro social structures that construct the conditions of people's lives, and has begun to develop important concepts and theories, for example, occupational justice and injustice (Stadnyk et al, 2011; Wilcock & Townsend, 2000) and occupational possibilities (Laliberte Rudman, 2010). Work has also begun to focus on the local social world and the importance of collective occupation (Kantartzis & Molineux, 2017; Ramagundo & Kronenberg, 2013).

The perspectives that I will discuss here are particularly related to this local social world and the way we live together in our communities and neighbourhoods. The structuring influences of laws, policies, and institutional organisations are important in facilitating or not the inclusion of all, and families' beliefs and practices may also be vital. However, I will focus on the local world, on the collective occupation that takes place and on the power inherent in such occupation to shape the nature of the social fabric of the local community, and through that the individual's lived experience as well as potentially the macro institutional context.

Therefore, my aims are:

1. To provide an introduction to some contemporary understandings of social inclusion.
2. To discuss the importance for the processes of social inclusion of the local, public world, of recognition between people, and of participatory citizenship.
3. To introduce collective occupation and its contribution to the construction and maintenance of this local social world, and
4. To consider how we may use collective occupation to facilitate processes of social inclusion, including offering some examples.

As a complex and multi-dimensional topic, inevitably I will only be able to discuss some of the perspectives around social inclusion. My perspective is largely based on my work over the past years based in Europe. Where possible I

will incorporate relevant discussion from the literature related to Japan. However, I remain aware that in bringing to the Japanese context concepts developed in Anglophone societies, inevitably there will be places of disconnect and discord. I hope that these will become useful points for discussion.

Introducing social inclusion

I would like to start with a brief story. It is told by one of the members of the ELSiTO group (Empowering Learning for Social Inclusion through Occupation), a European learning partnership of mental health service users and professionals (see www.elsito.net). For some years we worked together to understand the nature and processes of social inclusion. The story is related by a woman I shall call Lucy, aged about 35 years from Belgium.

Art classes

My first year in painting-class. I'm in a group of people who have normal jobs, being married, having children... People who are mentally quite healthy. And that's another way for me; I'm not very used to it. Most of the times, I cope with fellow sufferers, but it's nice to meet people who live normal lives. Doing the painting is nice, but I also like to go for a drink after the lessons. I'm feeling accepted most of the times, and that feels good. That's something that gives me hope, I'm not all excluded from society. There are ways to move a little bit in it, even though my art-school friends know that I'm having a mental disease. The lessons are intense, I have to concentrate for three hours and that isn't always easy to do. But the drinks afterwards are really relaxing and I'm glad to spend some time with "normal" people. (Elsito, n.d.a)

This situation is familiar to many of us from our professional work. Lucy, like many people with mental illness, is working to find opportunities in life that "give her hope that she's not all excluded from society, that there are ways to move a little bit in it", and that people can know about her disease and accept her. She is working on her social inclusion. But social inclusion is an important process for us **all** to work on.

Although we know that the real wealth of a nation is understood to be its people and the contributions that each of us may make (United Nations, 2010), throughout the world people find themselves excluded from many of the everyday activities that we take for granted for a wide variety of reasons. Social exclusion may be perpetuated by laws and policies, but also by the beliefs and attitudes of us all, usually directed at groups of people - women, children, the elderly, people who are sick or with different abilities, people of another nationality, religion, culture or gender, people who are poor, homeless, drug dependent, unemployed, etcetera. People may experience discrimination and stigma, due to one or more of these characteristics.

The concept of intersectionality (Crenshaw, 1989) reminds us that people incorporate multiple identities that create overlapping and interdependent systems of discrimination and disadvantage. Such intersectionality may make intervention aimed at only one characteristic limited in its effectiveness. Lucy has experience of mental illness, is unemployed and is a woman, however she is also educated and very creative - multiple identities influencing what she can do, where and how, but also what she wants to be and become.

Social inclusion attempts to deal with some of these issues. While it is a concept to which people can relate and in general terms most people would sign up to as something positive, it is in reality very complex and raises numerous questions that are important to consider (Labonte, 2004).

One question is: Inclusion into what? One of the criticisms of the term social inclusion is that it may be used to support the assimilation of certain groups of people seen as excluded, into mainstream society. Historically, this was the approach in many countries towards aboriginal peoples and minority groups.

Another question is: Who decides? Policies promoting social inclusion are mainly established by governments and those in power - those whose policies may also be excluding essentially (Labonte, 2004). What about those people and groups who do not want to be part of the mainstream society?

Who decides how much inclusion is enough? Is there a danger that in supporting one group who is excluded to become more included, that other groups, almost as excluded, will find their own position worsening?

Do we all support inclusion for all? Will society always exclude some groups? There may be resistance to change by some people in positions of power; exclusion may be deliberately pursued by some for their own profit (UNDESA, 2009).

How do we manage the complexity of our increasingly diverse societies, for example with the mobility of populations, cities with multiple languages, religions, customs and traditions?

Despite these questions some key ideas around social inclusion are evident. At this time, most definitions of social inclusion recognise it to be a process and not a utopian vision. It requires change by all and does not refer to the assimilation of some into a society created by others. It requires a critical and reflexive approach to our own attitudes and beliefs (Gerlach, 2015; Kinsella & Whiteford, 2011). It is a process of working towards a 'society for all'. This process includes recognising the "dignity, value and importance of all, not only as ethical norm and moral imperative but also as legal principle, societal norm and ultimately as practice" (UNDESA, 2009, p. 5). It is a complex and multi-dimensional process and it is useful to briefly consider some of these dimensions, which will also help position the importance of occupation.

Dimensions of inclusion

An important dimension is the structural. In Lucy's story we see how policy and laws may work to facilitate inclusion of people facing disadvantage, as she is encouraged to take part in a community art group. Social inclusion may be seen as a right and its attainment a matter of justice. Since the 1990s promoting inclusion and integration have been at the core of numerous policies of the United Nations. Most recently "Leaving no one behind" is the central aspiration that underlines the 17 Sustainable Development Goals adopted in 2015 (UN, 2015). In Europe we see the recent establishment of the European Pillar of Social Rights (2017). This renewed the commitment of the

European Commission to not only economic but also social development in Europe, promoting inclusion in terms of ensuring that all people have a basic income, housing and access to services. While not legally binding across European countries, such guidelines provide direction for national policy. I understand that similar laws and policies are in place in Japan.

However, social inclusion is also a subjective experience. In her story, Lucy noted how in the Art class she is joining ‘normal’ people, how they know about her mental illness, how good it is to be able to spend some time with them in the art class and to relax afterwards. Another ELSiTO member said that you need to feel that you “*are something more than the stigma*”. We can all think of a time when we ‘objectively’ fitted, but subjectively felt excluded, and social inclusion must consider the subjective experience of inclusion as well as the structural aspects (Ammeraal, et al, n.d.).

This brings us to the third dimension, that is our ‘doing together in everyday life’, our relationships with others as we ‘do’ with them. Reflecting the definition of social inclusion as societal norm and as practice, this requires us to turn a critical lens towards a more local level of how we live together in our neighborhoods and communities. I understand this to refer to the Japanese concept of *Seken*, defined by Yoshida (2003) as “the community of people with whom we share daily life”, coming between our family and close friends and those unknown or strangers. But how do we manage our doing together, how well are we doing?

Experiencing exclusion in our everyday lives

People with experience of disability commonly report the impact of stigmatizing attitudes of colleagues and neighbors on their work and social lives (WHO, 2011). Angell (2014) identified hegemonic practices between school children in the United States, re-enacting in the classroom attitudes related to gender, race, ability, and age.

In Japan as well, inclusion would seem to be an important topic to discuss at this time. While traditionally identified as a collectivistic culture with an importance on human interaction and togetherness in people’s everyday lives

(Wado, 2011), this is increasingly challenged. The Cabinet Office (2007, cited Hommerich, 2015, p. 49) reports that in 1975 53% of the population stated they had close relations with neighbours, a figure dropping to 11% in 2007. It is reported that since 2000 there has been growing social inequality and a weakening of social networks, leading to the creation of the term “society without bonds” (*muen shakai*) (Hommerich, 2015, p. 48). Feelings of dis-connectedness, a reduced sense of belonging to and value for society (subjective social exclusion), particularly when combined with socioeconomic precarity, is leading to lower civic engagement (Hommerich, 2015). Alongside this, in 2015 there were 18.45 million people living alone in Japan, including 5.93 million people over the age of 65 (Statistics Bureau, 2017).

While living alone may be a choice for some, it may lead to loneliness, especially if combined with decreased engagement with one’s community. Loneliness has been linked to early mortality and the development of Alzheimer’s disease in UK research (AgeUK, 2017). Neighbourhood dissatisfaction, including trust in neighbours and neighbourhood safety have been associated with poor self-rated health in Japan (Oshio & Urakawa, 2012). Having social networks, access to employment and other conditions, are understood to be important social determinants of health (CSDH, 2008).

From this brief review it seems evident that consideration of processes of inclusion for all in the daily lives of our neighbourhoods and communities is an important focus at this time. Before exploring the contribution of collective occupation to these processes, a number of key, underpinning, concepts will be considered.

Three ideas for social inclusion: The construction of the public world; the importance of recognition; and participatory citizenship

Underpinning these concepts is the understanding that humans are social animals. This is almost intuitively accepted by most people, while research also demonstrates that the human species has always operated as communal groups with skills in social cooperation (Fukuyama, 2012).

The Public World

The first idea is the importance of the public world. The ‘polis’ - the city state of Ancient Greece - was not so much a physical place as a construction of *polites*, of ‘citizens’, coming together to enable collaboration and order (Aristotle, n.d.). Building on this idea, the social theorist, Hannah Arendt writing on the human condition (Arendt, 1958) discusses various types of human activity. Two of these, labour and work, are individual in nature. The third is *action*, which she describes as our actions and words that combine to create a network of actions and relationships, a common world of public life. This public world is vital to the expression of identity and of action, beyond that of the home and the work place. For those excluded from such *action*, for example due to the ongoing demands of labour for survival, they are in effect excluded from the public world and from the possibility to fulfil their identity and their potential.

Arendt describes how people acting together, what she calls “sheer human togetherness”, creates power. This power, the plurality of the collective when united, is the condition that enables the space for action, to act upon traditional or hegemonic boundaries (Allen, 2002), to create change. Therefore, the idea of a public world is important not only for the expression of our identity, our skills, and the fulfilment of our potential, but also for the power created by people coming together creating a space for action.

Recognition

In this discussion of the public world, we see that the public self is a relational self and the fundamental importance of our relationships with others. This brings us to the second idea, the concept of recognition. Nancy Fraser and Axel Honneth are two philosophers whose work around concepts of social justice, including on recognition (Fraser & Honneth, 2003), is useful in demonstrating that social inclusion is not only a matter of economic exclusion and of distribution as influenced by class, but is a matter of the relationships of different social groups.

Recognition as a concept, arises from the philosophy of Hegel, and the idea that one’s sense of self as a subject, as a person, only comes from being recognised by another, “that social relations are prior to individuals and

intersubjectivity is prior to subjectivity” (Fraser & Honneth, 2003, p. 10). If one is denied recognition, or ‘mis-recognised’, one develops a distortion of one’s relationship to one’s self and injury to one’s identity (Fraser, 2000). Mis-recognition can be part of laws, formally institutionalised through policy or professional practice, but also informally institutionalised through the long-standing social practices and customs of civic society (Fraser, 2000), the local social world that is our focus today.

Addressing recognition, Fraser argues for the notion of “parity of participation” (Fraser & Honneth, 2003, p. 36) by which justice requires social arrangements that permit all adult members to interact with one another as peers. Honneth describes the importance of recognition in three areas: affection and care from loved ones, legal recognition of one’s rights, and recognition of one’s achievements as a “productive citizen” (Fraser & Honneth, 2003, p. 141).

We can see that incorporating recognition into processes of social inclusion emphasises the importance not only of the re-distribution of resources (for example, policy addressing poverty), but also is about addressing unjust practices around identity. Addressing such unjust practices requires a destabilisation of all existing status differentiations in society, of cultural values that impede parity of participation, and a change in everyone’s self-identity (Honneth & Fraser, 2003).

These ideas, that people are inherently social, that the power of people coming together shapes the nature of the public world, and the importance of recognition between us, are important to the third idea, that of participatory citizenship.

Participatory citizenship

Citizenship is understood in many ways in countries throughout the world, depending on their unique socio-historical trajectory, and the concept of participatory citizenship has been proposed quite recently in the European Union. Participatory citizenship has been defined as “participation in civil society, community and/or political life, characterized by mutual respect and non-violence and in accordance with human rights and

democracy” (Hoskins et al, 2012, p. 4). Citizenship here is much more than a legal status identifying the relationship of state and subject, rather it incorporates active participation, living together and the shaping of our common world, reflecting ideas of collective occupation. It would seem to be relevant to ideas of citizenship in Japan, being related to civic engagement, moral and social responsibilities, evident, for example, in the engagement of school children in school life and committees (Davies et al, 2010).

This is citizenship where all can participate, where we all contribute to the construction of our common shared world, incorporating Arendt’s notions of Action. Incorporating this concept of participatory citizenship into our discussions of collective occupation, points not only to the importance of certain occupations, such as voluntary work, engagement in political activities and local committees, but also to the relationships between us and our roles as citizens. This means that primarily we recognise ourselves as citizens and the responsibility that each of us have in determining the position of our fellow citizens in, and the nature of, our shared world. In terms of our work as occupational therapists it offers an alternative to the potentially problematic relationship of therapist and client, based in unequal positions of power, and recognises us to be first fellow citizens, before any other relationship (Fransen et al, 2015).

We can see the importance of the concepts of the public world, of our recognition of each other and of participatory citizenship, to our understandings of processes of social inclusion. We also have begun to see how these link with the importance of our doing together in the construction of our social worlds, and we will now explore this doing together, our collective occupation, in more detail.

Collective occupation

Collective occupation has been defined in a number of ways, but I propose that it is defined “by its unique construction through the numerous people engaged in it and the power that is thereby produced, as well as by its intention or purpose towards the social fabric” (Kantartzis & Molineux, 2017, p.173). This is occupation that can only occur in the plurality of people coming together. It recognises that by coming together power is created that

shapes our shared social world. The shape that our common world takes may exclude and discriminate against some of our fellow citizens, but also through our collective occupation people can be and become together.

An example is the Japanese festival of viewing the cherry blossom (On-Hanami). The atmosphere and the doings of this occupation occur when people come together each year. In coming together, they powerfully recreate this as an annual tradition with associated experiences, symbols and memories.

That some occupation is only possible through numerous people coming together, has been recognised since Fogelberg and Frauworth’s (2010) discussion of distributed occupation. They suggested that some occupation such as national holidays and sporting events, are collectively produced across four nested levels: population, community, group and individual. More recently Zango Martin et al, (2015) propose that in many parts of the world everyday occupations are primarily social practices, while Peralta-Catipon (2012) noted how for immigrants collective occupation reconstructs familiar social structures, ways of relating and doing, from their countries of origin.

We begin to see an increasing focus on the importance of our doing together. However, in identifying an intention towards the social world, I particularly draw on the work of Ramugondo and Kronenberg (2013), who discussed how human relationships were the intent of collective occupation. They noted how individuals and communities influence each other and therefore have responsibilities to each other. In identifying the focus of collective occupation on relationships, we are enabled to explore how the relationships maintained through collective occupation may come anywhere on a continuum between the positive and the oppressive.

Therefore, a critical approach is required to recognize the nature of the social world produced through collective occupation. We can see the importance of recognising social inclusion as ‘practice’ (UNDESA, 2009) and our own contribution to inclusive or exclusionary practices as we recognise or not, in our action and words of collective occupation, the position and possibilities of our fellow citizens.

Collective occupation takes a number of forms and a quote from another ELSiTO member will introduce the first of these: *‘What is really nice is to be able to walk down your street and for someone to say hello’*. What a simple request, but for an activity that may be increasingly uncommon in some of our urban areas, and as more and more people live alone, one that is increasingly important.

Informal encounters in public places

Walking down the street is one aspect of ‘informal encounters in public places’, one of the forms of collective occupation identified in research (Kantartzis, 2017). Through our daily encounters with our neighbours and others in our neighbourhood, village or town, we build networks, not only social networks but also networks of occupation - regular places where we do our shopping, fix our car, get our hair cut, find a baby sitter, or a doctor. We recommend such places to others, we learn that someone needs help or advice, we ask for help or advice ourselves. Here, what we do, where, when and with whom is shaped by related occupation; knowledge, skills, products and support are exchanged, and we are recognized and given identity as an inextricable part of the local, social world (Arendt, 1958; Hammell, 2014).

Exploring the conditions of possibility for daily life, for such informal encounters, is therefore particularly important in relation to the social space of the neighbourhood. We see the combination of physical spaces, ideology as well as traditions that construct our neighbourhoods and the daily occupation within them (de Certeau, et al, 1998).

To join this network of occupation we must be recognised, be seen and acknowledged as a person, a person with value and something to contribute. We must be able to physically access public space - to go down the street or into the shop - and it must be safe for us to do so. Legally we must also be able to access public space, for example, in some countries women are excluded from some public spaces. At the same time socio-economic exclusion prevents the access of poorer people to up-market restaurants and bars either due to pricing or ‘style’.

The network of occupation may exclude and include by

whom it approves (‘he’s a good and honest decorator, I recommend him for the work you want to do on your house’), and by the norms and social values upheld in the practices of public space (for example, how we talk to and about people with disability living in our neighbourhoods). We can remember Lucy who was encouraged that her class mates accepted her company for a drink after the classes, ‘despite her mental disease’.

We begin to see in this discussion of the collective occupation of informal daily encounters, the public world of action and voice as discussed by Arendt. We also see the importance of ‘recognition’. However, some of our collective occupations in public places take a more structured form, as in the development of formal and informal associations that organise public action.

The collective occupation of organisation and association.

Local associations are a common feature of many neighbourhoods and communities, aiming to address local needs and interests, and often originating in daily encounters and conversations. A large variety may exist, including those organising local business (for example, a Farmer’s cooperative), supporting particular population groups (for example, a Women’s Association), or particular recreational activities (for example, Athletics Association, Folklore Association) (Kantartzis, 2017). There are 3000 neighbourhood associations in Japan (Pekkanen, et al, 2014). These local associations are important in providing opportunities to be visible and acknowledged, and to take on roles and use skills, while contributing to the common good and influencing local affairs. These are opportunities that may not be available in the work place or home.

We see here the power of the collective in how these associations ‘arrange’ the social fabric, or organise the public world. However, a critical approach enables us to see how they may not address all the issues of the local population, or even exclude some people. For example, how do transgender people ‘fit’ with associations with male or female only membership. Other associations may exclude through expectations of the skills and abilities of members.

More informal organisation of action may occur to address new challenges or unexpected events. Frank and Muriithi (2015) discuss the civil rights movement in the USA as an example of collective action that led to far reaching changes in the everyday lives of many Black people in the United States. Organisations may also respond to local events or crises by adapting their activities. An example is described by Shiino and Hasegawa (2017) in the description of the response of occupational therapists with 'Disaster support activities after the great East Japan Earthquake in Fukushima'. Important to these occupations is the idea of collective emotion, which is central to the third form of collective occupation.

The collective occupation of celebration and commemoration

These are those collective occupations which have at their core the sharing of emotions. Multiple groups of people may be involved in their production, reflecting ideas of distributed occupations (Fogelberg & Frauworth, 2010). However, rather than focusing on how they are constructed, it is important to notice the experience of heightened, intense emotion (Von Scheve & Ismer, 2013).

Throughout the world communities have annual or seasonal events, some of which are celebrations of religious or historical events, while others are opportunities for shared mourning or remembrance of national or local tragedies. Where traditional rituals may be becoming less common, other forms of heightened collective emotion may be enabled, for example, in sports crowds and pop concerts (Getz, 2007). With such collective occupation, shared actions, rituals, and the re-creation of symbols support the group's coherence and solidarity (Collins, 2004), and enable a sense of belonging.

Three forms of collective occupation have been discussed: informal encounters in public places, organizations and associations, and celebrations and commemorations. While discussed separately in practice they frequently overlap. For example, neighbors coming together in daily encounters may identify a local need, leading to the establishment of a new association. The power of collective emotion may support action for change (for example, in the American Civil Rights movement, or contemporary Peace marches).

Collective occupation has also been discussed primarily in terms of people physically coming together. However, the virtual world means that collective occupation may take place in locations across the globe. An example is the football World cup, where although the matches usually are held in one country, related occupation, carrying experiences and meanings, is transferred via the media, to many people throughout the world.

And as we recognize the importance of collective occupation we need to consider the form of the social world that they are shaping. We need to consider whether that social world is strong, vibrant and inclusive.

Developing collective occupation

The final part of this discussion will consider how we can support the development of such vibrant and inclusive neighbourhoods and communities through collective occupation, including providing some examples of projects in Europe that have been developed.

Before doing so I would like to take a moment and ask you to consider your own collective occupations, your daily encounters, your involvement in associations, your opportunities for shared emotional expression, and perhaps other forms not mentioned here. Consider: what are the important elements for you? But also consider: Who is not there, who is not taking part, how and why are they excluded? Keep them in mind as we discuss how we might support their engagement and inclusion.

Developing inclusive public places

How can we work towards inclusive public places? Physically accessible, safe, public places are an important first step. However, Seamon (2006) uses the phrase 'place ballet' to emphasise how a temporal and environmental regularity is required that enables people to become known and engage with each other. We should consider where and when can people meet regularly, examples may be the local shops, weekly markets, religious services, places with regular occupations. Lucy, went to weekly art classes. However, does everyone in our local community have regular access to an inclusive public place? We may need to work to create such places.

We also need to ensure that they have an atmosphere that facilitates people to feel a sense of belonging, to feel included. Features that promote such an atmosphere include: that they have ‘everyday’ furnishings, that chairs and tables can be moved to fit those entering the space and how they want to use it, that there are flexible opening hours, and that there are some people who regularly attend and become familiar faces (Kantartzis, 2013; Oldenberg, 1999).

Raising awareness

And not only may we need to establish such places, but we may also need to raise awareness of the importance of our doing together and our inter-relatedness. Consciousness of the inter-relatedness of people exists strongly in some cultures, for example, in the African ethic of Ubuntu (Ramagundo & Kronenberg, 2013). In other communities, traditional features, for example, a shared belief that people with mental illness may be dangerous, leads to discrimination against them and their exclusion (Hamer et al, 2017). We heard Lucy’s awareness of potential stigma around her mental illness.

However, the public world of Arendt is constructed by voice and action and as people come together we can see the possibility for raising awareness of issues of oppression and injustice. The pragmatist John Dewey described the importance of developing specific opportunities for debate, discussion and persuasion to lead to change in communities (Cutchin et al, 2017). Paulo Freire (1996), noted that action for change requires processes of conscientization, reflective processes that enable the co-creation of knowledge around the nature of the constructed social reality. It is important that there is awareness and acknowledgement of the importance of the quality of our relationships, of respect for the dignity of all, and of getting to ‘know’ the other as citizens together.

Awareness of the language we use is also important, as language “creates, contests and recreates power, authority and legitimization” (Taket et al, 2014, p. 4), and positions can be created, but also challenged through language.

Engagement in collective occupation

These processes may go alongside or be integral to

engagement in collective occupation. We should recognise the importance of small everyday doings, of greetings, of small kindnesses, of sharing (Ammeraal et al, n.d.), of daily encounters.

As well as these small, everyday doings, we may want to be aware of, or create opportunities for, more extensive engagement in collective occupation. Research in Japan has demonstrated the positive association between voluntary participation in neighbourhood associations and subjective well-being (Tiefenbach & Holdgrün, 2015). Volunteering, taking part, whether through associations or traditional celebrations, offers opportunities for people to share experiences of engaging in occupation, to utilise and develop their skills, to experience social connections and a sense of belonging as well as to contribute to the local community and the development of local policy (Ripat et al, 2010).

This is not only about enabling marginalised individuals to join the ongoing activities of the majority. We may need to consider how we might reconstruct such occupations (Frank, 2015; 2017; in press) to enable us to develop new ways of doing together or develop new collective occupation to address contemporary needs.

In completing this presentation, I will offer some examples of collective occupation specifically developed to support inclusive communities and they demonstrate the interweaving of the three forms of collective occupation. I am aware that there are also such projects being developed in Japan, and I hope these examples will support your reflections on your own local activities.

The Praatcafé “PolParol”, Leuven, Belgium

This café was developed to address “the challenge of seeing and meeting people in a relaxed, non-structured environment”. Every Thursday night a meeting is organised at the café “Pol Parol” for unemployed persons with mental health problems who live independently in one neighbourhood of the city and other local inhabitants including immigrants. We see the importance of the ‘place ballet’ with a regular meeting place and times, but also informal encounters - people drop in. Those who attend are encouraged by the staff, together with students of the local

occupational therapy programme (HuB Brussels) to become engaged with the running and management of the café. They develop the skills required to be involved in an informal collective organisation. Social activities, such as barbeques, are also organised, again promoting skills, confidence and a sense of belonging, as well as incorporating shared emotion (see www.elsito.net).

Urban gardening in Hildesheim, Germany

This project was developed in a collaboration between a university and a community in a deprived area of Hildesheim, Germany. Following discussions, students and members of the community worked together to create raised flowerbeds that became a focus point for the local community. We can see again the significance of ‘doing’ together, the power of collective occupation bringing people together to meet and collaborate, while developing a sense of empowerment and self-efficacy. This collective organisation around an identified local need, utilises urban gardening as a grass-roots movement towards ecological sustainability (Schiller et al, in press).

Art in the Scaffolding, Belgium

Finally, this community-based project, demonstrates the power of collective engagement in a range of creative occupations, bringing the local community together, not only physically but also emotionally. Once a year a celebration is held over a weekend in the local, disused church. The annual event is organised through a collaboration between a local community mental health centre, the local children’s school, members of the church, and the local council. It is attended by all members of the community, while many people spend time over the year to prepare and present paintings, drawings, poetry-recitals, video-art and many other forms of creative expression. (see Kunst in de Steigers, www.elsito.net)

Conclusion

This presentation has explored the contribution of collective occupation to social inclusion. Social inclusion is complex and dynamic. It is influenced by multiple levels from the macro, structural level of laws and policies to the subjective level of each individual’s experience. As a dynamic process the construction of inclusion varies from situation to situation and moment to moment. Multiple factors,

including race, disability, language, gender, age, and poverty may all contribute. All elements are contingent, each aspect influences the others, and change in one will bring change in others.

I have proposed that the public world of our local neighbourhoods and communities is important for developing processes of inclusion. This is not to ignore that many people are excluded by economic policies and “the use, abuse and distribution of power” (Labonte, 2006, pg.118), or to underestimate the importance of employment. However, the approach taken here supports the need for change at the local level (Carpenter, 2009). It is proposed that collective occupation is an important constituent in such processes. Doing together, as citizens, engaging in everyday life together, recognising each person and their potential contribution, creates the conditions of our social world. Active, engaged communities, critically addressing their own exclusionary values and practices, can support all their members to flourish.

It is evident that social inclusion is not (only) a desired outcome but much more a process, an ongoing work that we need to be continually engaged with throughout our everyday lives. It is not primarily the responsibility of Lucy and others facing exclusion, but is dependent on us all, professionals, academics, researchers, as people, as citizens. It requires work at multiple levels, from the individual to the structural, but the power of occupation to drive change is of critical importance. Harnessing the power of collective occupation may enable the social transformation required to ensure inclusion for all.

References

- Age UK (2017). *Later Life in the United Kingdom*. https://www.ageuk.org.uk/Documents/EN-GB/Factsheets/Later_Life_UK_factsheet.pdf?dtrk=true accessed 2017.7.2.
- Allen, A. (2002) Power, subjectivity, and agency: Between Arendt and Foucault. *International Journal of Philosophical Studies*, 10(2),131-149.
- Ammeraal, M., Kantartzis, S. & Vercruysse, L. (Eds.) (n.d.) *Doing Social Inclusion*. Amsterdam: Uitgeverij Tobi Vroegh - Sebastian Tijsma. www.ELSiTO.net accessed 2016.10.2.
- Angell, A. M. (2014). Occupation-centered analysis of social difference: Contributions to a socially responsive

- occupational science. *Journal of Occupational Science*, 21, 104-116.
- Arendt, H. (1958). *The Human Condition* (2nd ed.) Chicago: The University of Chicago Press
- Aristotle. (n.d.) Politics. Book III. <http://classics.mit.edu/Aristotle/politics.3.three.html> accessed 2017.9.2
- Carpenter, M.(2009). The capabilities approach and critical social policy: Lessons from the majority world? *Critical Social Policy*, 29(3), 351-373.
- Collins, R. (2004). *Interaction ritual chains*. Princeton: Princeton University Press.
- Commission on Social Determinants of Health (CSDH) (2008). *Closing the gap in a generation: health equity through action on the social determinants of health*. Final Report of the Commission on Social Determinants of Health. Geneva, World Health Organization.http://www.who.int/social_determinants/final_report/csdh_finalreport_2008.pdf accessed 2015.9.14
- Cutchin, M.P., Dickie, V. & Humphrey, R. (2017). Foregrounding the transactional perspective's community orientation. *Journal of Occupational Science*, 24(4), 434-445.
- Davies, I., Mizuyama, M.& Hampden Thompson, G. (2010). Citizenship education in Japan. *Citizenship, Social and Economics Education*, 9(3),70-178.
- De Certeau, M., Giard, L. &Mayol, P. (1998). *The Practice of Everyday Life. Vol 2: Living and Cooking* (trans. T. Tomasik). Minneapolis: University of Minneapolis Press.
- Crenshaw, K. (1989). Demarginalizing the intersection of race and sex: a black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *The University of Chicago Legal Forum*, 140,139-167.
- Empowering Learning for Social Inclusion through Occupation (ELSiTO) (n.d.) Website. www.elsito.net
- Empowering Learning for Social Inclusion through Occupation (ELSiTO) (n.d.a) *Stories of work. Leisure*. <http://elsito.net/?cat=4> accessed 2017.9.8.
- European Commission (2017). *Commission recommendation of 26.4.2017 on the European Pillar of Social Rights*. C (2017) 2600 final. file:///C:/Users/TOSHIBA/Downloads/C(2017)%202600_1_EN_ACT_part1_v6.pdf accessed 2017.7.2
- Fogelberg, D. & Frauworth, S. (2010). A complexity science approach to occupation: Moving beyond the individual. *Journal of Occupational Science*, 17, 131-139.
- Frank, G. & Muriithi, B. (2015), Theorizing social transformation in occupational science: the American civil rights movement and South African struggle against apartheid as 'occupational reconstructions'. *South African Journal of Occupational Therapy*, 45, 11-19.
- Frank, G. (2017). Collective occupations and social transformation: A mad hot curriculum. In D. Sakellariou & N. Pollard (Eds.) *Occupational Therapies without Borders: Integrating justice with practice*, 2ed. Edinburgh, Elsevier Science, pp. 596-604.
- Frank, G. (in press). Social transformation in theory and practice: Resources for radicals in participatory art, occupational therapy and social movements. In H. van Bruggen, S. Kantartzis, N. Pollard (Eds.) '*And a seed was planted...*' *Occupation based approaches for social inclusion*. London: Whiting & Birch
- Fransen, H., Pollard, N., Kantartzis, S.& Viana-Moldes, I. (2015). Participatory citizenship: A critical perspective on client-centred practice. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 22, 260-266.
- Fraser, N. (2000) Rethinking recognition. *New Left Review*, 3, May-June. <https://newleftreview.org/II/3/nancy-fraser-rethinking-recognition> accessed 2017.9.20.
- Fraser, N. & Honneth, A. (2003). *Redistribution or Recognition*. New York: Verso
- Fukuyama, F. (2012). *The origins of political order*. London: Profile books
- Gerlach, A. (2015). Sharpening our critical edge: Occupational therapy in the context of marginalized populations. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 82(4), 245-253.
- Getz, D. (2007). *Event studies: Theory, research and policy for planned events*. London: Routledge
- Hamer, H.P., Kidd, J., Clarke, S., Butler, R. & Lampshire, D. (2017). Citizens un-interrupted: Practices of inclusion by mental health service users. *Journal of Occupational Science*, 24(1), 76-87.
- Hammell, K.W. (2014). Belonging, occupation, and human well-being: An exploration. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 81(1), 39-50.
- Hommerich, C. (2015). Feeling disconnected: exploring the relationship between different forms of social capital and civic engagement in Japan. *Voluntas*, 26, 45-68.
- Hoskins, B., Abs, H., Han, C., Kerr, D & Veugelers, W. (2012). *Contextual Analysis Report. Participatory Citizenship in the Europe Union*. Brussels: European Commission,

- Europe for Citizens Programme.
- Kantartzis S. (2013). *Conceptualising occupation: An ethnographic study of daily life in a Greek town*. Leeds: Leeds Metropolitan University.
- Kantartzis, S. & Molineux, M. (2017). Collective occupation in public places and the construction of the social fabric. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 84(3), 168-177.
- Kinsella, E.A. & Whiteford, G. (2009). Knowledge generation and utilization: Toward epistemic reflexivity. *Australian Occupational Therapy Journal*, 56, 249-258.
- Labonte, R. (2004). Social inclusion/exclusion: Dancing the dialectic. *Health Promotion International*, 9(1), 115-121.
- Laliberte Rudman, D. (2010). Occupational dialogue: Occupational possibilities. *Journal of Occupational Science*, 17, 55-9.
- Oldenburg, R. (1997). *The Great Good Place*, 2nd ed. Cambridge, MA.: Da Capo Press.
- Peralta-Catipon, T. (2012). Collective occupations among Filipina migrant workers: Bridging disrupted identities. *Occupational Therapy Journal of Research*, 32, 14-21.
- Oshio, T. & Urakawa, K. (2012). Neighbourhood satisfaction, self-rated health, and psychological attributes: A multi-level analysis in Japan. *Journal of Environmental Psychology*, 32, 410-417.
- Pekkanen, R., Tsujinaka, Y. & Yamamoto, H. (2014). *Neighbourhood Associations and Local Governance in Japan*. London: Routledge.
- Peralta-Catipon, T. (2012). Collective occupations among Filipina migrant workers: Bridging disrupted identities. *Occupational Therapy Journal of Research*, 32, 14-21.
- Ramugondo, E. & Kronenberg, F. (2015). Explaining collective occupations from a human relations perspective: Bridging the individual-collective dichotomy. *Journal of Occupational Science*, 22, 3-16.
- Ripat, J.D., Redmond, J.D. & Grabowecky, B.R. (2010). The winter walkability project: Occupational therapists' role in promoting citizen engagement. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 77(1), 7-14.
- Schiller, S. with Auracher, F., Bode, K. Buttlar, H-J., Constabel, V., Koselleck, U. & Liebig, C. (in press). The transformative potential of urban gardening. In H. van Bruggen, S. Kantartzis, & N. Pollard (Eds.) *'And a seed was planted ...' Occupation based approaches for social inclusion*. London: Whiting & Birch
- Shiino, Y. & Hasegawa, K. (2017). Disaster support activities after the great East Japan Earthquake in Fukushima. In D. Sakellariou & N. Pollard (Eds.) *Occupational Therapies without Borders: Integrating justice with practice*, 2ed. Edinburgh, Elsevier Science, pp. 506-512.
- Seamon, D. (2006). A geography of Lifeworld in retrospect: A response to Shaun Moores. *Participation*, 3, 2, 1-20. http://www.participations.org/volume%203/issue%202%20-%20special/3_02_seamon.htm accessed 2017.9.3
- Stadnyk, R., Townsend, E. & Wilcock, A.A. (2011). Occupational justice. In C. Christiansen & E. Townsend (Eds.), *Introduction to Occupation: The art and science of living*. Upper Saddle River, NJ: Pearson, pp. 329-58
- Statistics Bureau (2017). Statistical handbook of Japan 2017 <http://www.stat.go.jp/english/data/handbook/c0117.htm> accessed 2017.10.15
- Taker, A., Crisp, P., Graham, M., Hanna, L. & Goldingay, S. (2014). Scoping social inclusion practice. In A. Taker, L. Hanna, S. Goldingay & L. Wilson (Eds.), *Practicing Social Inclusion*. Abingdon, Oxon: Routledge, pp. 3-42
- Tiefenbach, T. & Holdgrün, P.S. (2015). Happiness through participation in neighbourhood associations in Japan? The impact of loneliness and voluntariness. *VOLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, 26 (1), 69-97.
- United Nations Department of Social and Economic Affairs (UNDESA) (2009). *Creating an Inclusive Society: Practical strategies to promote social integration* <http://www.un.org/esa/socdev/egms/docs/2009/Ghana/inclusive-society.pdf> accessed 2016.12.2.
- United Nations (2015). *Sustainable development goals*. <http://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/> accessed 2017.10.12.
- United Nations (2010). Human Development Report 2010. The Real Wealth of Nations. Pathways to Human Development. http://hdr.undp.org/sites/default/files/reports/270/hdr_2010_en_complete_reprint.pdf accessed 2016.12.2
- Wado, M. (2011). Strengthening the Kawa model: Japanese perspectives on person, occupation, and environment. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 78, 230-236.
- World Health Organisation (WHO) (2011). *World Disability Report*. Geneva: WHO http://www.who.int/disabilities/world_report/2011/report.pdf accessed 2016.12.2
- Wilcock A. A. & Townsend, E. (2000). Occupational justice: Occupational terminology interactive dialogue. *Journal of Occupational Science*, 7, 84-86.
- Yoshida, M. (2003). The reluctant Japanese litigant: A 'new'

- assessment. *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*. Discussion paper 5. <http://www.japanesestudies.org.uk/discussionpapers/Yoshida.html> accessed 2017. 10.12
- Von Scheve, C. & Ismer, S. (2013). Towards a theory of collective emotion. *Emotion Review*, 5, 406-13.
- Zango Martin, I., Flores Martos, J., Moruno Millares, P. & Björklund, A. (2015). Occupational therapy culture seen through the multifocal lens of fieldwork in diverse rural areas. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 22, 82-94.